

部長登場

農政部長 松石 旭

一九四五年食糧研究所において、「農業と食生活の未来像について」というテーマで食糧関係専門家四百人・未来学者二百人についてアンケートを行っているが、その質問内容は、食糧の生産、加工・流通・消費・栄養・福祉等にわたって八十項目に及んでおり、今後の三十年間に実現の可能性と、その時期について調査されたもので、興味深く読んだ。それによると、まず人口と食糧問題を解決し、飢えからの解放は何時か？という問いについて回答者の八〇％が一九九〇年の十五年後とし、その頃になると食糧は無機質から化学合成により工業的に生産され、植物の栽培によるだけでなく、光合成を利用して澱粉を作るようになるだろうと答えている。



すなわち、クロレラや、開発が進んでいる石油蛋白等の原料による飼料化は、一九七六年代に普及され、ソーセイジに使われるのは一九八〇年としている。既に大豆蛋白は人造肉としてハンバーグに使用されている事は衆知のことである。又人間の健康については、特に

食生活とガンや動脈硬化の原因となるコレステロールとの関係が解明され、予防のメドがたつのは一九八〇年代の前半になるとみている。

野菜については、人工環境を利用して同年生産が実用化されるのが一九八〇年頃と予測している。既にその先駆としてビニールハウスによる施設園芸で、ナス・キュウリ・イチゴ等はもちろん本県特産のメロン・西瓜等重油を利用して早進化が行われ、冬期から出荷されて、季節知らずに出回っている。また、露耕栽培といって全然土を使わず、礫の中に液肥を注入した人工環境による立体生産・周年栽培も行われており、今後は必ずしも広面積を必要とせず、培養生産という方

食糧問題を展望する

更に今後十年を経過すると、農水産物の生産が工場の生産環境で、培養的な型態をとるようになれば、流通面では、コールドチェーン方式が産地から家庭の台所まで整備され、航空輸送が更に大型一般化し、世界各国の生鮮食料品や、特産物が店頭並び、手軽に入手できるようになるのも一九七八年といっている。このことは現実には、そのような推移になっている。次に無農薬生鮮食料品の供給という観点から天敵による病虫害の防除の方法が確立し、食品の汚染がなくなるのは昭九八五年前後となると予測している。

米の消費は一九七八年日本人一人当た

法がとられるだろうと言っている。

畜産においても、完全配合飼料により牧場なしに工業的に肉牛も飼育され、既に肉豚養鶏はそのような装置化・システム化が完成されている。

又、今後はマツタケの人工培養・ノリのタンク培養等も漸次可能となるだろうとしている。

水産面では、マグロ、カツオの養殖漁業は一九八〇年代の初期から後半にかけて実用化が見込まれると云っているが、米国をはじめとする二百哩水域規制等の問題は、我が国の漁業蛋白資源の確保の上から深海魚を含めた養殖漁業の発展を急務としているとき、早急な実現を望みたい。

り七十二・七キロとなり、一九八四年にはエネルギー係数(家計費に占める食糧費の割合)が二〇％を割り、この頃になると、人造肉が畜肉の消費より多くなるとみている。

さらに、レジャーによる食糧生産・家庭園芸や釣り等が量的にも無視できなくなり、その時期を一九八五年と二〇％の人が予測している。

この未来像は、全く経済性や、品質・味覚・嗜好等までには手が回らず、いわゆる腰だめの予測にすぎないと考えられるが、かといって農業生産物の生産手段がどう変り、全人類への食糧の供給という観点から、そのポテンシャルの追究が

可能かどうかということを見ると、この試みは意義があると思う。

しかも、これが一〇年―二〇年後の近い将来の姿を科学的手法をもって予測していることは、今後の対応を考える上から興味深い。又エネルギー係数が二〇％を割り出した時の食糧供給の対応は、質的要素が第一に求められてくるであろうことから、食糧行政のあり方も大きく変わらなければならないであろう。

だが我が国の食糧問題は、現在米の生産が過剰の基調にあるからといって、決して楽観は許されない。米を除くその他のあらゆる食糧が自給できない状況にあって、現時点においても国際間のトラブルが生ずるとすれば、全く混乱状態に陥ることは自明である。加えて将来のことを考えると、尚更のことである。

松下幸之助氏は、新国土創成論で「日本国は食糧問題で行き詰る。今において抜本的対策を講じなければ、食糧亡国になる」と述べておられる。熊本及び九州にはなお無限といつてよいくらい潜在資源があると思う。有明・不知火海の干拓という潜在力もあり、阿蘇久住は又その底力を発揮するまでには至っていないが無限に近い力を持っている。要は国民が現在の自由な生活におぼれることなく、食糧問題について、もっと真剣に取り組まなければならないと考える。農業見直しは、農業者側だけが考えるものではなく、国民的視野であることを確認しなければならぬ。

オープンした

＝熊本＝ トラックターミナル

熊本市小山町・九州自動車道熊本インター隣接地に九州高速道路ターミナルKKの手で進められていた「熊本トラックターミナル」が六月末完成した。

このターミナルは敷地七万七千六百平方メートル。今回完成したのは一期工事分五万三千四百七十二平方メートルで、七十バス(荷扱い場)のターミナルと十台のトレーラが同時に作業できるトレーラーヤード、二百台収容の駐車場、地下一階地上二階の管理棟などがあり、一日千七百五十トンの貨物をさばく。

五十五年度に予定されている二期工事分が完成すれば、百十バスのターミナル、二十台のトレーラが作業可能なトレーラーヤード、三千平方メートルの貨物保管庫をもつようになり、一日二千七百五十トンの貨物がさばけるようになる。また九州縦貫高速自動車道を利用する大型車輦と都市部を走行する小型車輦との間の貨物の積み替え、仕分け、保管およびトレーラーのつけ替え基地として、自動車輸送の効率化、物流の近代化に大きな役割を果たすことになる。



▲ 熊本市小山町・九州自動車道インター隣接地にオープンしたトラックターミナル。1日1,750トンの貨物がさばかれる。



▲ 荷物の仕分けを待つトラック。



▲ フォークリフトでトラックに積み込まれる貨物。